



被災地ウクライナの子どもたちを迎えて開かれた「キッズ・バイブル・キャンプ」  
(2022年夏、カルパチア山脈で)

## 良い聞き手に

彼女にはマリヤという姉妹がいたが、主の足もとに座って、主のことばに聞き入っていた。

ルカの福音書 10章39節

ミッション・宣教の声 主幹  
黒田 穎一郎



「あの人は、人の話を全く聞いていない!」と怒る人がいます。聞いていれば理解できることも、肝心なことを聞いていないため問題となるのです。聞き逃しということもあります、人間関係において相手の話を聴くことは大切です。人間関係で大切な要素の一つ、それは「良い聴き手」になることです。

今日のテキストはよく知られた箇所です。マルタは接待に超多忙でした。一方、マリアは主イエスの足もとに座り「主のことば」に耳を傾けていました。そこで忍耐の限界を感じたマルタは、「主よ。私の姉妹が私だけにもてなしをさせているのを、何ともお思いにならないのですか。私の手伝いをするように、おっしゃってください。」(10:40)と言いました。そこでイエスは教えられました。「マルタ、マルタ、あなたはいろいろなことを思い煩って、心を乱しています。しかし、必要なことは一つだけです。マリアはその良いほうを選びました。それが彼女から取り上げられることはあります。」(10:41,42)

イエスのことばはマルタへの非難ではなく、「マリアはその良いほうを選んだ」と言われました。イエスは「良い聴き手」になることを評価されました。私たちも互いの関係において、傾聴は大切なことですが重要なことは次の3点です。

**1. 主に聴くこと** なにはともあれ、私たちは主が何と語られるか傾聴することです。主はみことばを通して、個人のデボーションを通して、信仰書を通して、また兄弟姉妹との交わりを通して語られます。主が語られる方法は多種多様で、主は最適な方法でお語りくださいます。

**2. 自分の心に聴くこと** 人は自分を偽ることはできません。正直に自分に向き合うことです。心静めて默想し、自分の心に正直に尋ね聴くことです。神の前に生きる人とは正直な人です。私たちは良い聴き手でしょうか。

**3. 相手に聞くことです** じつは私たちは前の2点を踏まえてこそ、他人の話に耳を傾けることができるのです。傾聴こそ人間関係の祝福の鍵です。

私たちもマリアにならい、「良い聴き手」になろうではありませんか。

前回、2年半前になりますが、2021年3月号で寄稿させていただいた時には、コロナ禍のアメリカ東海岸の社会状況、日本語教会一般の状況について書かせていただきましたが、今回は、私どもの「ニュージャージー日本語リスト教会」の働きについて書かせていただきます。

## ニュージャージー日本語リスト教会

私自身、大学院での勉強のためにニュージャージーにやつてくるまでは、ニュージャージーがどこにあるかも知りませんでした。ニュージャージーはアメリカの東海岸、緯度でいうと青森と同じくらい北の方にある州です。そのニュージャージー州をざっくり北と南の2つに分けると、北はニューヨークの都市圏、南はフィラデルフィアの都市圏となります。そして、ニュージャージー日本語リスト教会は、その北の方、ニューヨーク都市圏にあります。ニュージャージーに住みながら、ニューヨークで働いておられる方々も多くおられます。私どもの教会は、経済や文化の中心地のニューヨーク近郊で、勉強や仕事のために来られた方々に日本語で福音を伝えたい、という一握りの人々の祈りによって、35年前に生まれました。35年間の教会の歴史の中には何度も存続危機や、嵐の中を通過することもあったそうですが、今回のコロナ禍も、本当に大きな困難でした。

3年前の3月にすべてがシャットダウンされたときに、この新型コロナウィルスの影響がこんなに長く続くとは誰が思っていたことでしょうか。私も2020年の夏頃、お借りしている教会の広い体育館の中に6フィートの間隔を空けて、イスを置いて集まっていた頃、「来年の夏くらいまで、続くらしいよ」という話を聞いて、「まさか!」と思ったことを思い出します。それが「来年の夏」どころではなく、2023年になってから、やっと、ほとんどの働きを、対面でマスクなしで再開することができるようになりました。

## イベントと行事の再開

私たちの教会では年に2回、イースターとサンクスギビングに持ってきた「日曜日の食事の持ち寄り」、今年のイースターに3年ぶりに再開することができました。また、月1回土曜日に中高生の集まりを持っていて、普段は教会に来ていない子たちもたくさん集まるのですが、そこでも一緒にクッキングをして、一緒に食事ができるようになりました。コロナ禍直前に準備しスタートしようとしていた「親子クラス」は、オンラインでのスタートとなりましたが、こちらも今は普通に集まって、



2023年イースターエッグハント

10人くらいの小さなお子さんを連れたお母さんたちの触れ合いの場になっています。他にも幾つもの集まりを、制限を取り払って持つことができるようになったことは、本当に大きなことだと思います。

ニュージャージー日本語リスト教会  
錦織 学 牧師

教会の働きの中で、一緒に時間を過ごしたり、一緒に食事をしたりすることはとても大切なことです。おそらく、そのような時を持つのは、互いのことを信頼しているから、相手も自分のことを受け入れてくれている



2023年イースター愛餐会

から、と感じるからではないでしょうか。それがコロナ禍で互いに距離を取るようになり、お互いの家に招き合ったり、一緒に食事をしたりすることがとても難しくなりました。テクノロジーのおかげで、離れていても、面と向かって会うことはできるようになりました。しかし、今、こうして多くの場面で物理的に集まるようになると、やはり今まで無理をしていたのかなあ、と思います。そして、いつの間にか、お互いの心の距離もつくってしまったのでは、と思います。

## 神のビジョンに従う

互いの心の距離、急に詰めようと思っても難しいことです。少しづつ、信頼関係を築いていくのだと思います。私達の働きはまだこれからだと思われます。そんな「さあ、これから」という時に、一つ心に留めなければいけないと思わされていることがあります。それは、どんなことをするときにも、神様は、私達を取り扱い、造り変えてくださる、その事を通して、伝道の働きを進めようとしておられることです。復活のイエスと共に40日間を過ごした弟子たち、彼らはイエスのこれから働きに期待していました。「イスラエルのために国を復興させるのは今ですか?」と。しかし、イエスは「聖霊が降るときに、あなたがたは地の果てまで私の証人となる」と言われました。他の教会の働きを見て「自分たちも...」と気が焦ったり、時代の波に乗ろうと「今こそ、これをしなければ!」と慌てたりする私達です。そんな私達に、神様は、ご自身のビジョンに従うようにと願っておられます。具体的にどんなことをするかよりも、私達のうちに聖霊様を送ってください、聖霊様によって私達を造り変える事を通して、御業を進めようとしておられるのです。まず、神様が私達のうちに働き、御業をなしてくださるようにお祈りください。

(つづく)

## 黒田禎一郎牧師と行く イスラエル10日間の旅

涼しくて快適な秋のイスラエル、砂漠のネゲブ平野から緑いっぱいのガリラヤまで、聖書を手にし、イエスと聖徒たちの道を訪ねる、ゆったりした楽しい旅です。

期間：2023年10月18日(水)～27日(金)10日間

募集人数：20人(最少催行人員15人)

旅行代金：568,000円 燃油チャージ114,000円(2023年2月現在)

申込締切：2023年8月31日(木)

団長：黒田 禎一郎 利用航空会社：エミレーツ航空、関空発

お申込・問合せ：(株)ホーリーランドツーリストセンター

大阪市中央区北浜2-3-10 VIP 関西センター 5F

電話：06-6226-1307 フックス：06-6226-1308 企画：ミッション・宣教の声

ヨーロッパとウクライナの間に、人口約260万人の小国モルドバがあります。ソ連の崩壊後、いくつかの金融危機、ドニエストル紛争、そして今回のウクライナ戦争によって、小国は大きな打撃を受けています。そのモルドバにも生ける真の神を信じる聖徒がいます。

## 救援活動が扉を開く

ドイツの宣教団体「フリーデンス・ボーテ」は、モルドバのいくつかのプロジェクトをサポートしています。その1つが、シナライにある「エリム・クリスチヤン教会学校」です。伝道師ワシリイ夫妻は、25年以上にわたり児童伝道してきました。2020年から翌年にかけて「コロナパンデミック」の影響で、日曜礼拝が禁止された時期がありました。ワシリイ師はその時間を利用し、子どもたちの家庭を訪問し食料品パッケージを届けました。それを機に子どもたちの親たちと連絡を取ることができました。そして子どもたちと家族の状況、そしてニーズを知ることができました。



届けられた薪を前に立つ兄弟姉妹

モルドバの昨冬は、多くの家族にとって非常に厳しいものでした。ロシアからのガス供給が停止し、木材価格が急高騰しました。薪1立方メートルに対して70～100ユーロ（約11,000円～15,600円）の値段がつき、多くの家族が困窮しました。「フリーデンス・ボーテ」は、「暖かいキャンペーン」の一環として、100世帯以上に薪を提供しました。キャンペーンを通して、神と永遠について幸いな話しさをすることができ、モルドバ人たちに大変感謝されました。中には目に涙を浮かべて感謝の意を表す方もいました。今夏には木材が安くなることを期待し、人々は夏に薪を購入しようと考えています。

## オアシスと明るいスポット

日常生活のきびしい生活の中で、多くの女性が一人で子育てをしています。その理由は男性が国外に出稼ぎに出て、家族を養っているからです。そのような社会でアルコール依存者やタバコの吸いすぎから続発性疾患にかかり、早期に生命を落とす人も出ています。父親または母親がアルコール依存症である家庭では、家庭内暴力や虐待が起こり、苦しむのは子どもたちです。そのようなモルドバ社会で、大人も子どもも日曜日に「エリム」に来ることは、とても意義深く感謝されています。

そこは彼らにとって、罪という砂漠の真ん中にあるオアシスのようです。

ワシリイ伝道師は薪や木材を配布している中で、さまざまな人々に会いました。誰でも人はその人なりのストーリーがありますが、中でもイワンとの出会いは印象深い者でした。彼はもうすぐ40歳になろうとしていますが、17歳の時に電気事故で両腕を失い障害年金を受けて生活しています。その上、羊の世話をしていますが、両腕のない彼には大変な仕事です。そのイワンが自分の小屋にワシリイ師を迎えて、救い主イエス・キリストの福音を聞くことはほとんど奇跡に近いことでした。しかし、神はそれを可能としてくださいました。



両腕を失ったイワン

## 実りある奉仕

別のある家には、婦人と4人の子どもが住んでいました。彼女の夫は家族を置き、家出しました。長男ニコライは16歳で、最近自動車整備士見習いを始めました。彼は誇らしげに壁の「アルファベット文字表」を指さして言いました。「これは初任給で妹のために買いました。学校に通うお金はありませんが、後で聖書を読めるように、そして彼女が文字を読めるようになってほしいのです！」彼はフリーデンスボーテからの壁掛け聖句入りカレンダーにも感謝していました。ワシリイ師は、「ここでの奉仕は、決して無駄はない。この少年はその実です。彼は毎週の日曜日の礼拝に参加し、聖書の一節を読んだり、神への賛美の詩を語ったりしています。彼が今後も主イエスに忠実に従い続けることを祈っています。」と述べています。

ある家では祖母がワシリイ伝道師を出迎えました。彼女は2部屋を間借りし、3人の孫を育てて生活していました。子どもたちの両親はどこにいるのか不明で、祖母は「分かりません。最後に会ったのは3年前です。」と言いました。彼らこそ主イエス・キリストを必要としている人たちです。サタンは家族を崩壊させ次世代を破壊しようとしています。主イエスなしでは、実に惨めで滅びの道を歩むことになります。どうぞお祈りください。



エリムで贈物を配る

## クボルタ村の教会

キリストの福音は、約2千年前から人の心を変えてきました。クボルタ村の教会に集まる人々は増加し、今も宣教の働きは続いている。会堂内には、まもなく大人も子どもも入れなくなるでしょう。おそらく数年以内に増築するか、別の建物を移る必要があるでしょう。どうかお祈りください。クボルタ村には忠実なペトルとベラ夫妻がいますが、人々がキリストを信じるようになると、混乱が起こることが安易に想像できます。なぜならモルドバ正教会の神父たちは、プロテstantに反対するムードを作り出しているからです。どうぞお祈りください。（つづく）

韓国には、放映開始から10年以上続いているバラエティー番組「いま会いに行きます」という、脱北女性たちが中心となるトークショーがあります。年齢も様々な脱北女性たち数人が、毎週ひな壇に勢ぞろいし、北朝鮮での生活をユーモアを交えて紹介し、画面には笑いが溢れ、和やかな雰囲気で番組は進行していきます。しかし、そんな明るい彼女たちの姿からは想像もつかないほど、それぞれが壮絶な人生を歩み、涙無しでは見られない場面もあります。この番組の出演をきっかけにスカウトされ、韓国芸能界で女優として活躍している北朝鮮女性がいます。2019年に日本でも空前のブームを巻き起こした、韓流ドラマ「愛の不時着」で、彼女は北朝鮮の一村人という端役にもかかわらず、彼女が出演する場面では主演女優にも劣らず、美しく輝いた存在感がネット上でも話題になりました。華々しくデビューしたキム・アラですが、彼女の半生は苦難の連続と孤独な少女時代でした。そんな彼女はどのように神と出会い、また神は御自身の栄光のために彼女をどのように用いて下さるでしょうか。



韓国芸能界で活躍する  
キム・アラ女史

## 取り残された幼い姉妹

キム・アラ(現在32歳)は、北朝鮮最北端の中国国境沿いの小さな村で生まれ育ちました。父親は石炭を採掘する炭鉱夫であり、母親は国営農場で働いていました。両親とアラと妹の4人、この幸せな一家も北朝鮮国民を襲う苦難の嵐に翻弄されました。父は劣悪な環境でどんなに働いても、その報酬は一食分にもならず、そんな生活に嫌気がさした父は、ツケで酒を飲んでは泥酔して帰ることが常となりました。母も農場でなりふり構わず働き、家族を支えていましたが、そんな母はある日を境に家に帰らなくなりました。やがて、母が消息不明になってから1年が経ち、何も言わずに姿を消した母を恨んでいた父も、とうとう家に帰って来なくなり、幼い姉妹だけが取り残されました。彼女たちは草を食べて飢えをしのぎ、まだ11才であったアラと妹を守ってくれる人は誰もいませんでした。両親からの愛を信じて疑わなかったのに、その両親から捨てられ、裏切られた悲しみと怒りを抱きつつも、アラは父母がいつか帰って来てくれるかもしれませんと信じ、待つしかありませんでした。

## 流浪少女

そんなある日、父は見知らぬ女性と子どもたちを連れて、ひょっこりと帰ってきました。アラは父が帰って来た喜びよりも、我が物顔で、家に突然上がり込む赤の他人たちが、今日から共に暮らす家族となることに得体の知れない恐怖を感じました。新しい母と兄弟たちは案の定、アラと妹につらく当たり、継母の機嫌を損なうと食べさせてもらうこともできず、生き延びるためにひたすら耐えるしかありませんでした。そんな娘たちを見て、不憫に思った父は、アラと妹を叔母の家に連れて行きました。叔母の家では、

少しばかり食べさせてもらうことができた彼女たちでしたが、この家でも追い出されないようにと畑仕事や家事手伝いなど必死で働きました。しかし、叔母の家でも生活状況が悪化し、そこでも居づらくなりました。そんな彼女たちを今度は叔母の友人が不憫に思い、アラと妹を引き取ってくれました。

## それぞれの選択

ある日、アラの目の前に見知らぬ男が現れました。その男は、死んだと思っていた母から送られたプローカーでした。そのプローカーの話によると、母が姿を消したあの日、食糧難ゆえに家族のために食べ物を調達しようと母は中国へ渡りましたが、プローカーに騙され、中国で漢民族の嫁として売られてしまい、帰れなくなりました。それでも母は、娘たちを呼び寄せようと必死で働き、やっとのことでプローカーを娘たちのもとへ送りました。自分は母に捨てられたと思っていたアラは、素直に母のその思いに応じられず、プローカーについて行くことはできませんでした。しかし、アラが13才になった時、再びそのプローカーが母から送られ、また迎えに来ました。

この時のアラは、母の思いを受け入れようと考えました。学校にも通えず、このまま北朝鮮で生きるより、たとえ脱北に失敗しても死んでもいいから、母ともう一度暮らしたいという思いが募り、プローカーについて行くことにしましたが、妹は北朝鮮に残ることにしました。北朝鮮に残す妹に後ろ髪を引かれながらも、アラは豆満江を渡り、中国大陸に足を踏み入れました。

## 小さな希望

中国に入り、食べ物を口いっぱいに頬張った後、緊張しながら到着したその場所は小さな村でした。そこで、会いたくてたまらなかつた懐かしい母に再会しました。充血した母の目には、娘に対するすまないという気持ちが映し出され、二人は首を抱き合い、声を上げて泣きました。アラは母が中国で結婚した家に住むことになり、言葉の通じない母の夫を父と呼ぶ暮らしが始まりました。母は中国にいても働き通していましたが、食堂で働いた賃金を母は一円も受けずにいました。全ては娘たちを北朝鮮から出すため、プローカーへの報酬として身を粉にして働きました。まだ北朝鮮に残っている妹のために働き続けている母を見て、アラは愕然としました。母が自分たちのために、こんなにも苦労をしていたことも知らず、母を誤解し、恨んでいたことで、母に合わず顔もありませんでした。また、言葉の通じない他人を父と呼ぶことも抵抗があり、アラは外に出歩き、他の家々で野良仕事や台所の下働きとして働くようになりました。言葉が通じなくても心ある中国の父は、アラに教育を受けさせ、アラは中国でようやく学校へ通うことができました。そんな時、母は子どもを産み、生まれてきたその子は人形のように可愛く、美しい女の子でした。いつも北朝鮮と一緒にいた妹が恋しかったアラにとって、この生まれてきた新しい生命は小さな希望となり、自分もやっと家族になれた気がしました。

(次号につづく)

## ドイツ

「世界中のほぼ3分の1の国で、人々は宗教や信念のために不利益を被り、迫害受けている。」とカトリック教支援団体「キルヒエ・イン・ノット」(ミュンヘン)は発表しました。最新の報告書「世界における宗教の自由」によれば、迫害は、ニカラグアや北朝鮮など、196カ国中28カ国で蔓延しています。またイラクやトルコなどの33カ国で、宗教団体に対する差別が存在しています。さらにチリ、フィリピン、ロシア、ウクライナなど23カ国が監視リストに入っています。同報告書の編集チームのマーク・フォン・リーデマン代表は、インド、中国、パキスタンを含む47カ国で状況が悪化していると語っています。改善したのはエジプト、ヨルダン、カタールなど9カ国だけです。報告書を発表した「キルヒエ・イン・ノット」のF.リップカ編集長とM.F.フォン・リーデマン氏は、民族宗教ナショナリズムには宗教の自由が含まれると述べています。また21カ国がイスラム教過激派の被害を受けている。パキスタンに加えて、影響を受けるのは主にアフリカ諸国です。しかし、ニカラグアなど49カ国の権威主義国も信仰の自由を制限しています。「世界における宗教の自由」報告書は、1999年以来2年ごとに発行され、すべての主要な宗教を網羅しています。



礼拝に参加する子どもたち

ドイツ国教会は2020年のコロナ感染症の流行以来、教会に集う人々が大幅に減少したことを見発表しました。コロナ禍前に比べて2020年には礼拝出席者は31%の減少、教会学校は61%、青年会は51%減少しました。現在、教会活動への参加と復帰が大きな課題となっています。受洗者数も減少する中、特に将来を担う子どもたちは重要課題であり、力を注ぐことが急務となっています。どうぞお祈りください。

## イタリア

イタリア政府アントニオ・タジャーニ外相は初めて、信教の自由のための特別代表を任命しました。「プレミア・クリスチャン・ニュース」の報道によれば、ダビデ・ディオニシ氏がこのポストに任命されます。同氏は世界中のキリスト教徒の迫害に、特に焦点を当てると言われます。彼はバチカン国の日刊紙「オッセルヴァトーレ・ロマーノ」の元外交部長でした。カトリック援助団体「援助を必要とする教会への援助」(本部ブリュッセル)のマルセラ・シマンスキー代表は、この発表を歓迎しています。この動きは欧州各政府にも広がることが期待されています。「ハンガリーにおいて迫害されたキリスト教徒のための部門が設立されて6年後に、やっと他国がこの現実を認めることになる。」とシマンスキー代表は語っています。



「キルヒエ・イン・ノット」の  
F.リップカ氏(左)とM.F.リーデマン氏

## イラク

キリスト教支援団体「シェルター・ナウ」が支援するイラク北部の児童センターは、より多くのスペースが必要となっています。このセンターは、数千人のヤジディ教徒が暮らすバードル市近くの難民キャンプ内にあり、活動は5年前に60人の子どもたちで始まりました。現在、7人のヤズィディ教教師が、最大250人の子どもたちを追加オファーできるよう企画しています。たとえば、子どもたちはアラビア語と英語を学び、コンピューター技術も学び、音楽、スポーツ、芸術の分野の教育も施されます。身体と精神の健康と衛生、それに社会で役立つスキルを学習できるよう注意が払われています。同児童センターは、若者や家族向けの集会センターを作りたいと考えている。「シェルター・ナウ」は1988年からアフガニスタンで活動し始め、2014年からはクルディスタン自治区(イラク北部)でも活動しています。お祈りください。



マシフ兄弟

## パキスタン

国際人権委員会(IHHR)とキリスト教出版社「IDEA」は、パキスタン人のノウマン・アスガー・マシフ兄弟を2023年7月の「今月の囚人」に挙げました。マシフ氏は現在24歳、彼のためには祈るよう世界中に呼びかけています。彼は2019年7月1日、イスラム教預言者モハメットを冒涙した疑いで、警察が真夜中に彼の家に入り逮捕しました。その後2023年2月3日、保証金を払い釈放されました。しかし5月30日、彼はパキスタンのバハーワルプール市で再逮捕されました。彼の弁護士によれば、この主張はまったく根拠がありません。検察側は彼が午前3時半に公共の公園で、9人から10人のグループに預言者モハメットを冒涙する写真を見せたと主張しています。しかし彼の家族は、「彼はその時間帯は自宅のベッドにいた。」と証言しています。マシフ兄弟のいとこであるサニー・ワカス兄弟も、マシフ兄弟逮捕の数日前に預言者モハメットを冒涙した疑いで逮捕されました。ISHRとIDEAは、パキスタンのアリフ・アルヴィ大統領に対し、捕虜の釈放と安全確保に向けて取り組むよう要請しています。パキスタンは人口約2億3千万人、国民の約96%がイスラム教徒です。どうぞ、お祈りをお願いします。

## イラン

国際宣教団体「オープン・ドアーズ」(OD)によれば、イラン・アルメニア教会のヨセフ・シャバーチアン牧師は、5月28日以来刑務所生活を強いられています。逮捕理由は、国家に危害をもたらしたと考えられる地下教会活動でした。しかし、それを証明するために十分な証拠がないため10年の実刑判決が、2年に減刑されました。そして彼は出所後、イランのカヌー市からの移動禁止命令を受け、さらに2年間は国外渡航は禁止されることになります。ODは今回のようなイラン裁判所の判決は異例であり、家の教会関係者への取り締まりは、経済的犯罪者への判決に比べて刑罰ははるかに重い、と語っています。どうぞ、お祈りください。



ヨセフ・シャバーチアン牧師

## インド

5月初旬以来、インド北東部マニプール市では300以上の教会堂が放火され、100人が死亡、250人が負傷しました。これはインド国内騒乱の悲しい事実です。多くのメディアが民族紛争について取り上げていますが、キリスト教人権団体「ADFインターナショナル」のソフィア・ヘルダー氏は次のように説明しています。



破壊されたインフル市内の礼拝堂

5月3日以来、マニプールでは主にヒンズー教のメイティ派とキリスト教徒のクキ派の間で、大規模な暴動が発生しました。民族紛争の主な標的となったのは、クキ族とメイティ族の少数キリスト教徒たちでした。被害を受けた人々は、「自分たちの地区が略奪され、組織的に破壊された。」と報告しています。ADFの法的支援を行っている人権弁護士は、「これまでに300以上の教会堂が放火され、100人が死亡、250人が負傷、1千800戸の家が焼かれ、4万6,000人が地域から避難した」と語っています。

紛争は5月3日、マニプール全部族学生組合による抗議活動から始まりました。ナガ族とクキ族のキリスト教徒が大多数を占める学生たちは、マニプール最高裁判所の判決に抗議しました。学生たちは4月から、メイティス部族であるヒンズー教徒に部族としての地位が与えられていることに抗議しました。彼らには議会での議席数、公共雇用や教育での良い割り当て、土地に関しての特別な権利などの恩恵が与えられています。メイティ部族自体は少数派ですが、経済的、政治的に支配権を持つ人たちです。マニプール市では、その人々が多数派となっています。一方、キリスト教徒であるクキ族は現在、自分たちの部族特権を失うことを恐れています。

メイティ族とクキ族の間には、長年にわたり領土紛争、資源をめぐる競争、そして歴史的および宗教的対立が根深くあります。現在の紛争は、以前の多くの紛争と同様に、少数派である

キリスト教徒に対しての行動で、彼らの宗教を根絶するためでした。これまでには混乱の中で解決を探り、迷亭するキリスト教徒は部族の宗教、さらにはヒンズー教への改宗を余儀なくされていました。しかし、マニプール市で大きな闘いの渦中にあるバプテスト教会牧師は、ADFインターナショナルに対し、「暴徒たちは教会や迷亭するキリスト教徒の家に放火したが、それ以外の隣人の家のドアを傷つけることはしなかった。私たちはキリスト教徒であるという理由で、暴徒たちから攻撃された。」と語っています。世界一の人口を誇るインド国内で抱える問題は、決して小さくはありません。どうぞ、お祈りをお願いします。

## ウクライナ

6月6日夜、ウクライナ南部ヘルソン州のカホフカ水力発電所が決壊しました。結果、近隣地域の集落は洪水に見舞われ浸水状態となりました。直ちに多数のキリスト教救援団体が活動を開始しました。ダム決壊の原因はまだ不明です。ダムの決壊は洪水、水不足、家屋の破壊、被害、それに衛生問題も引き起こし大被害を住民に与えました。人道危機としては、地雷が近隣に流れ込む危険性があり、何万人もの人々が影響を受けています。現場には「マルティーザー救援サービス」、「ワールド・ビジョン」、救援団体「サマリタンズ・パース」等が入り懸命の救出活動を行なっています。サマリタンズ・パース国際会長のフランクリン・グラハム師は、「私たちは、神が彼らを忘れないことをウクライナの人々に思い出してもらうために、「イエスの名において救命物資を送ります」と祈り声で呼びかけました。彼らはチェルソン地方の人々のために、フィールドキッチンを建てました。救援団体「ディアコニー・カタストロフェン・ヒルフェ」は、5万ユーロ(約775万円)を提供しました。ウクライナのドイツ福音ルーテル教会も、浸水地域への救援物資を送り届けました。援助団体「ヘルピング・ハンズSCM」の創設者イワン・シュカート師は、5隻のボートをチェルソンに送り、「私たちは現場のウクライナの救助隊員や技術援助団体と緊密に連携をとっている。」と語り、懸命な救援活動をしています。



ゴムボートで老婆を救援する



## 編集後記

- 暑中お見舞い申し上げます。猛暑が続く中、読者の皆様はいかがお過ごしでしょうか。今月も「宣教の声」をお届けできる幸いを覚えます。また皆様の祈りとご支援にも御礼を申し上げます。
- コロナ禍の海外邦人宣教コーナーは、米国NJ日本語キリスト教会の錦織学牧師にレポートをお願いしました。どうぞ、外地にある日本語を話す方々への働きを祈り覚えてください。
- 秋10月の「イスラエル聖地旅行」はまだ受付中です。主イエス様が歩まれた地を聖書を手にする「ゆったり旅」です。関心のある方は、どうぞミッション事務局までお問い合わせください。平安。



ミッショント・宣教の声  
The Voice of Mission

発行人 黒田禎一郎  
年間購読料 ¥2,500(送料込)  
1981年12月初版発行(毎月1回1日発行)

Tel 06-6226-1334 FAX 06-6226-1336  
E-mail senkyo@vomj.jp URL http://vomj.jp/

The Voice of Mission  
MUFG Bank,Ltd. Sakaihigashi Branch  
Bank account No.3623132 SWIFT CODE : BOTKJPJT



■郵便振替口座 00940-3-301623  
■銀行口座 三菱UFJ銀行 堺東支店(店番205)  
普通口座 3623132「ミッショント・宣教の声」

Bank Address : 59-2 MIKUNIGAOKA-MIYUKIDOORI,Sakai-ku,  
Sakai-shi,Osaka-fu 590-0028 JAPAN TEL:81-72-221-3041